

## IT時代の地方自治

山梨大学工学部長 伊藤 洋

熊：「ご隠居さん、近頃アイテー、アイテーって新聞やテレビに盛んに出てきやすが一体全体何のことだね？『あっ痛てえ』とか『会いてえ』ってんなら分かるんですがね。」

隠居：「いやはや、全くだねえ。熊さんのように勉強しないもんじゃチンブンカンブンだろうね。まあそこにつけな。ちょっと分かるように教えてやるから。そもそもアイティーというのはIT、すなわち Information Technology という英語の頭文字でね。」

熊：「ご隠居さん、わしらにゃその横文字がつけねえ。どうせ教えてくれるんじゃ横文字無しでやってくれねえかね」

隠居：「いや悪かった。つまりアイティーというのは情報通信技術のことなんだよ。」

熊：「情報通信技術っていうんじゃ電話やテレビだって、ラジオや新聞だって立派に情報通信じゃないのかね？わざわざアイティーなんて舌をかみそうなこと言うことあねえと思うがね？」

隠居：「いや、たしかに電話やテレビも情報通信には違いないが、アイティーとわざわざ言うからにはちょっと違うんだ。熊さんもインターネットって聞いたことがあるだろう？あれがこの騒ぎを作っている元締めなんだよ。」

熊：「あるある、イーメールとか言って隣のうちの智ちゃんて茶髪の女の子がケータイとかでチョコチョコやっている、あれのことだね？」

隠居：「それだけじゃないが、まあそうだ。インターネットは今までの通信と違ってパケット交換というデジタル通信方式で、国際標準の通信規約を使いさえすれば『何時でも何処でも誰とでも』コンピュータを使って、文字や音声や映像のやり取りができるんだね。こういうのを、熊さんの嫌いな横文字でグローバルスタンダードって言うんだよ。そのインターネットには今じゃ国内で3,000万人、世界で2億人の人がつながっていて、熊さんがその気になりゃ2億人の人と情報のやり取りができるんだ。つまり、熊さんでさえも居ながらにして大新聞や大テレビ局と同じように情報を発信できる仕組みができてきているんだよ。そんなことは一昔前には想像もできなかったじゃないか。」

熊：「そんな結構なものをどうすりゃわしらに使えるってんですかい？」

隠居：「それが簡単なんだ。パソコンを買ってきてそれをCATVや電話線につなぎ、近くのプロバイダっていう会社に接続の申し込みをするだけでインターネットに入れちゃうんだよ。」

熊：「しかし、ご隠居さん、わしやパソコンなんてもつてないよ。そういうわしのような者にゃどうすりゃいいんですかい？」

隠居：「そりゃ、そのくらいの勉強はしなくっちゃいけない。まあ、今のパソコンは未発達で使い方少し勉強しなきゃ使えないが、もう少しすりゃ勉強しなくても使えるようになるさ。パソコンの性能は二年で三倍になるっていう法則があるぐらいでね。」

熊：「じゃ、わしはそれまで待ってるよ。」

隠居：「そりゃ駄目だ。人間ちょっと無理をする、ちょっと無理することを『勉強』って言うんだよ。ほれ、魚八の親爺が『熊さん、勉強しとくよ』って言いながらサンマの値段をほんの少しまけるだろう。あれが勉強だ。魚八にすりゃ、まけた分は痛いんだが、それをちょっと我慢して商売を長続きさせようって考えるんだよね。」

熊：「なるほどねえ。じゃ、わしもちょっとこの頭に無理を強いてみるか。しかし、ご隠居さん、それにしてもなんでアイティー、アイティーってあんなに騒ぐんですかい。森さんなんかはこの間まで『イット』って言ってたなんていうのに、今じゃアイティーでなきゃ夜も日も明けられないようなこと言ってますよ。」

隠居：「そうだねえ、熊さんはどうか知らないが、人間の活動ってものはそのあらかたが脳の活動なんだね。二十世紀の工業社会は筋肉活動の巨大なエネルギー浪費型社会だったんだが、来るべき二十一世紀ってのは頭脳の世紀だと考えられているんだね。アイティーは知識の授受やコミュニケーションがネットワーク上で行われる巨大な知的空間を作り上げる。そこに知的生産やモノの生産、経済活動など人間活動のほとんどが集まってくる。だから、ネットワークが世界だと極論することだってできるんだ。近代の産物だった国家というようなものだって透明になるんじゃないかって考えられているんだね。それだけにこれに遅れをとると大変なことになるかも知れないって政府は考えているんだね。」

熊：「話が段々難しくなってきたね。しかし、わしや仲間の寅や八五郎が住んでいるこの町はどうなるんですかい？ やっぱり透明になっちゃうんですかい？」

隠居：「いや、それはちがう。アイティーを通して世界がつながる一方でコミュニティというものはますます重要になってくる。アイティーでつながる世界の中で、わしらのコミュニティというのは結局それが世界の中心になるからなんだよ。今までじゃ、中心と言やあ、東京だったりニューヨークやワシントン、ロンドン、パリ、モスクワなんて考えていたじゃないか。全ての道がローマにつづくように、道路や空路や海路が集中した所でないと世界の中心とは言われなかった。それがインターネットは、さっきも言ったように世界標準の通信規約に準拠さえすりゃ何処からでもつながられる。しかも、このネットワークを管理する専門機関なんてものも無くて、自律した個人や集団が勝手に参加して分散的に活動している。だからインターネット社会では、中心と考えられるようなものは無くなって、自分の住んでいるコミュニティが世界の中心のように機能してくるんだね。この町なんか、工業化社会ではムダムダと過疎にさせられちゃって、今じゃ僻地だの辺境だのと言われているが、アイティー時代は断然違う。知恵と才覚で全く新しいコミュニティが形成できるんだよ。だから、コミュニティのアイティー化ってことがとても重要になってくるんだね。」

熊：「結局、わしらの町はインターネット時代にどうすりゃいいんですかい？」

隠居：「そうだね、準備しなくちゃならないものは山ほど有るのかも知れないが、最も重要なことは住民意識の涵養ってことだね。自律・分散・協調ってのがこれからのコミュニティと住民の基本的な在り方だと思うよ。そのために役場なんかは、住民の知る権利に積極的に応えること、そして情報公開をどんどん推し進めることだね。それにゃ、まず役場が範を示さないとなね。『昔の名

前を出ています』っていうようなボスが夜郎自大の政治や行政をやっているようじゃ駄目だ。地方分権って結局のところ地域住民の知的パワーの総量のことだからね。」

熊：「いやあ、よく分かりやした。今日からわしも天秤棒をマウスに換えて、「クマサンドットコム」でも立ち上げて、オラが町の特産品自然薯のネット販売でも始めやすよ。」

隠居：「そうだね、何時の日か熊さんがナスダックに上場される日が来るかもしれない。早いとこ頼むよ、わしもそう長生きできるわけじゃないんだからねえ。」